

# 『赤毛のアン』における発達のダイナミズム —複合的な人間形成論からの考察—

猶本真理子

## 序章

### 第1章 『赤毛のアン』を読み解く「人間形成論」の概要

#### 第1節 一人の人間が発達すること

#### 第2節 他者や社会と共に創り上げられる人間

### 第2章 発達と世代継承の関係

#### 第1節 世代連鎖性—儀式化—

#### 第2節 世代連鎖性—相互補完—

### 第3章 発達と歴史の関係

#### 第1節 新しい歴史の予感

#### 第2節 新しい歴史の提示—学校の先生を目指すこと—

### 第4章 発達と自己超越の関係

#### 第1節 新しい世界へと導く想像力

#### 第2節 究極的な他者との出会い

### 第5章 アイデンティティ

#### 第1節 アンの否定的アイデンティティ

#### 第2節 自分を受け入れるアン—居場所の獲得と他者からの承認—

#### 第3節 否定的アイデンティティから肯定的アイデンティティへの転換

## 終章

### 引用・参考文献一覧

## 序章

『Anne of Green Gables』（以下、邦題『赤毛のアン』と記す）は、1908年に、カナダの女性作家ルーシー・モード・モンゴメリ（1874－1942）によって書かれた小説である。おしゃべりで喜怒哀楽の激しい11歳の孤児の少女が、プリンス・エドワード島に来て、家族を構築し様々な人々と関わり合いながら、一人の女性へと成長し、発達<sup>1</sup>していく話である。

では、一人の人間が成長し、発達するとはどういうことか。この問いは、人間の永久的な課題として幾度となく問い続けられてきた。すべての人間は、この世に生を与えられ大人に養育され、社会や他者に出会い発達を遂げ、そしていずれ大人になる。これまで、人間の発達についての研究は、エリクソンやピアジェらによってなされてきた。彼らの偉大な研究を尊重しながら、本論では、人間が生涯に出会う様々な過程を透視化することで、冒頭の問いに対する一筋の答えが見出せるのではないかという観点から、その透視化を文学によって達成しようとする。ここで述べる透視化とは、人間の発達を文学のなかでの一形態として見るということである。

本論で達成する目的は、次の3点である。第1に、文学作品『赤毛のアン』の主人公アン・シャーリーや周囲の人間が、どのような発達を遂げたのかを明らかにすること、第2に、本論を読む者と研究する者、そして『赤毛のアン』のなかで生きる登場人物達の3つの視点を交差させること、そして最後に、第3の最終目的は人間が生き生きとした<sup>2</sup>生き方をするのはどのような環境に置かれた時なのか。また、自らにどのような発達が起きた時なのかを検討することである。

これまで『赤毛のアン』は、フェミニズム、発達心理学、家族心理学などの様々な視点から研究されてきた。なかでも『赤毛のアン』の研究者として多くの文献を出版している赤松佳子<sup>3</sup>は、『赤毛のアン』について、少女小説（また青春小説）で

---

<sup>1</sup>『心理学事典』によると、「発達」は次のように定義される。「発達をただ単に量的増大として成長と同義に扱うことは否定され、個体と環境との継時的な相互交渉を通して、さまざまな機能や構造が分化 differentiation し、さらに統合 integration されて個体が機能上より有能に、また構造上より複雑な存在になっていく過程としてとらえるのが今日一般に受け入れられる考え方であろう」。（『心理学事典』、平凡社、1981年、p.687）

<sup>2</sup> エリクソンは、「人のもっとも、うまくバランスのとれた瞬間」を「生き生きとしている」と表現している。（エリク・H・エリクソン『「洞察と責任」－精神分析の臨床と倫理』鍾幹八郎訳、誠信書房、1971年、p.107）

<sup>3</sup> 赤松佳子「少女小説・青春小説としての『赤毛のアン』」桂宥子・白井澄子編『シリーズ も

あると認めながらも「その魅力は枠内に収まらないもの」(赤松, 2008, p.49) と指摘したことに着目する。赤松のこの指摘は、一人の少女が、家族を形成し自立を志し成長するという少女小説(または青春小説)の捉え方だけでは、『赤毛のアン』を理解したことにはならないことを意味する。更には、教育、家族、フェミニズム、成長などという一側面または単独の切り口だけでは、『赤毛のアン』を真に捉えることが出来ないことさえも意味するのではないかと考える。

以上を踏まえ、今回、本論で試みることは、『赤毛のアン』を以上の先行研究でなされた一側面の見方ではなく、教育・家族・性差・カナダの歴史など、それらすべてを複合した人間学の観点から批評を行なうことである。『赤毛のアン』を人間学の観点による多面的な視点から批評を行なうために、西平直『エリクソンの人間学』<sup>4</sup>の理論を通して考察を試みる。

では、なぜ『赤毛のアン』を批評する際に西平の理論を使用するのか。その理由は、本論文で達成する目的との重なり合いである。まず、西平が「アイデンティティ」や「モラトリアム」といった言葉を世に広めた E.H.エリクソン<sup>5</sup>の理論を今一度再構成し直し、人間学を立体的な見方で検討していることを挙げる。西平の研究で最も特徴的な点は、「教育学」「哲学」などと一つの分野に固定化されることなく、広い範囲から、しかも立体的な見方で人間学の研究を試みている点にある。これは、冒頭で述べた本論文で達成する目的の1つ目<sup>6</sup>を、考察する上で有効であろう。

西平は、エリクソンの理論を研究する上で、研究者自身の人生を顧みること、読み手自身の人生経験を重ね合わせて読むことがエリクソン理論の魅力を最も豊かに開示されてくると述べている。<sup>7</sup>これは、冒頭で述べた本論文で達成する目的の2つ

---

っと知りたい名作の世界⑩ 『赤毛のアン』 ミネルヴァ書房、2008年、pp.41-50を参照。

<sup>4</sup> 西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会、1993年。

<sup>5</sup> エリク・ホーンブルガー・エリクソン (Erik Homburger Erikson, 1902-1994) は、アメリカの発達心理学者、精神分析家。「ライフサイクル論」、「アイデンティティ」や「モラトリアム」を提唱した人物。

<sup>6</sup> 「文学作品『赤毛のアン』の主人公アンや、周囲の人間がどのような発達を遂げたのかを明らかにすること」(本論文, p.48)

<sup>7</sup> 西平は、「およそ人間の研究、とりわけ生活世界に生きる私たち自身を含めて扱う人間学は、(中略) <研究者自身がまさにそれを生きつつある自分の人生>の反省的な問い返してもなければならぬ」(西平, 1993, p.4) と述べる。更に、「(中略) 読み手の側もその生活実感をくぐらせ、自分の人生経験を重ねあわせて読むこと、つまり読み手の側の自己洞察を同時並行させながら読むことであって、その場合にこそ、エリクソン理論の魅力は最も豊かに開示されてく

目<sup>8</sup>と重なる。

また、西平は、エリクソンの理論の原点を『健康』とは正反対の方向に向いていた人たちが再び生き生きとしてゆくとはどういうことなのか、その時、そこに何が生じ、何が獲得されるのか、そうした洞察を理論へと定着させることから、エリクソンは発想していたこと」(西平, 1993, p.87) と解釈し、人間が生き生きとした生き方が出来る発達は何かという問い自体がエリクソン理論の根源にあると主張する。このことは、本論文で達成しようと試みる最終目的の3つ目<sup>9</sup>を考察する上で有効であるだろう。

以上のように、今回、西平が再構築し直した、エリクソンの人間にまつわる発達・心理・哲学などを含めた複合した人間学に基づき『赤毛のアン』を考察することで、これまでの批評史には見えてこなかった、最も奥深い読み取り方が出来るだろう。

確かに、文学は、創りものであって人間の発達を導き出せるのではないという批判があるかもしれない。しかし、ここで逆に問いたいのは、文学作品のなかでの人間は何者かということである。文学の中に生きる人間は、何かしらの思考を持ち行動をする。作家は、登場人物それぞれに命を与え、特徴を与える。そして、作家は、登場人物それぞれの特徴に応じた発言や行動をする力を与える。これこそ、文学作品のなかの人間が「生きる」ということではないだろうか。

キャサリン・ダルシマー<sup>10</sup>は、既に『ロミオとジュリエット』をはじめとする文学作品から、思春期の少女に見られる経験に着目し、発達に関する精神分析学の観点から考察を行なっている。また、三好みゆき<sup>11</sup>は、「文学に目をむけてみて気がつくのは、精神分析的な観察をとおして記述されてきた発達についての基本的なテーマのいくつかは、すでに文学の中で例証されている」(ダルシマー, 1989, p.297) <sup>12</sup>

---

る」(西平, 1993, p.4) と述べている。

<sup>8</sup> 「本論を読む者と研究する者、そして『赤毛のアン』のなかで生きる登場人物達の3つの視点を交差させること」(本論文, p.48)

<sup>9</sup> 「人間が生き生きとした生き方をするのはどのような環境に置かれた時なのか。また、自らにどのような発達が起きた時なのかということ」(本論文, p.48)

<sup>10</sup> 『思春期の少女たち 文学にみる成熟過程』富山太佳夫・三好みゆき訳、1989年の著者。ダルシマーは、同上書のなかで「精神分析的な探求という、臨床の場からというよりも、むしろ文学のテキストから観察結果を引き出してくるような探求」(ダルシマー, 1989, p.5)を行なっている。

<sup>11</sup> 註10前掲書(ダルシマー, 1989)の訳者。

<sup>12</sup> 註10前掲書(ダルシマー, 1989)の結びのなかで、訳者である三好みゆきが述べている。

と語る。つまり、ダルシマーは既に、文学作品のなかから人間が発達を遂げていく中で経験するテーマが数多く見出せることに着目している。

ある一人の人間として、文学のなかで生きていくという意味で、一つのフィールドワークのような具体性が現れる。登場人物は、なぜそのように発言をするのか。なぜ、そのような行動をするのか。どのような思考を持つのか。どのような人物との交流を果たすのか。登場人物は、作品の始まりと終わりではどのような変化を成し遂げるのか。これらの答えを、発達の理論に沿って導き出すことで、本論では発達における具体性を文学のなかから見出すことを試みることにする。

## 第1章 『赤毛のアン』を読み解く「人間形成論」の概要

西平は、これまでのエリクソンの発達理論への研究に対し、「エリクソンによる発達研究の具体的成果ではなく、そうした発達研究を可能にさせた理論的枠組みの検討」（西平, 1993, p.72）を新たに行なった人物である。

西平直の『エリクソンの人間学』の書評を行なった髙橋久美子は、エリクソンが「言葉の使い手」として称され、「言葉」に対する洗練された感覚の持ち主であったことを受けて、西平がエリクソンの研究を「まるごと」理解するためにエリクソンの「言葉」にこだわりを続けて理論の意味を読解しようとしたことに対し、「エリクソンの『言葉』を丹念に解きほぐし、『まるごと』理解しようという本書の試みは十分評価されよう」（髙橋, 1994, p.120）と西平に対し評価をする。また、発達心理学を研究する小沢一仁<sup>13</sup>は、自らの論文に西平の『エリクソン人間学』を引用して考察を試み、私たちをアイデンティティの理解へと導く。

以上の書評で示されているように、西平がエリクソンの研究を「まるごと」理解することを試みたことは、つまりは西平の理論は人間学の全体的な把握を可能とする。また、髙橋は、西平について「『アイデンティティ』を、その本質を問うのではなく、いかに解釈すべきかという方向から考察している」（髙橋, 1994, p.119）と評価する。このことは、本論文において、『赤毛のアン』を複合的な人間学の視点から

---

<sup>13</sup> 小沢一仁「居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと」『東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編 26(2)』東京工芸大学工学部、2003年などの論文のなかで西平の『エリクソンの人間学』を引用し、読者をアイデンティティの解釈へと導く。

考察を試みることで、またアンのアイデンティティがどのように形成されたのかという視点を考察する上で有効であると言えるだろう。

## 第1節 一人の人間が発達すること

西平は、一人の人間が発達するとは、以下の3点と関わり合うとしている。

まず1つ目は、「前の世代によって育てられ次の世代を育ててゆくことの中でしか成り立たないとしたならば、発達とは、親から子へ子から孫へという連鎖とどういうつながりをもつのか」（西平, 1993, p.72）という「家庭や教育を場面とした世代継承」である。

2つ目は、「発達が、個々の歴史の一場面でのみ成り立っているとすれば、個人の発達は、歴史という巨大な流れとどういう関係にあるのか」（西平, 1993, p.72）という「変動する政治や時代の歴史」である。

そして3つ目は、「発達ということが、時に非連続的な飛躍をはらみ、その飛躍が、たとえば日常の論理を超越するような方向に向かうとしたならば、発達は自己超越の軸とどうつながっていることになるのか」（西平, 1993, p.72）という「日常的な意識を超えてゆく自己超越」である。

西平は、以上の3点が「エリクソンの発達論」を理解した上で最も重要であるとした。そもそも発達論とは、どのような理論なのだろうか。発達論とは、「親子関係論や教育学とも、社会変動論や歴史学とも、遊び論や宗教学とも、内在的な関連をもって展開されている」（西平, 1993, p.73）理論である。つまり、発達論とは、単独の切り口で理解出来るものではなく、複合的で多面的な理解と共に人間の発達を理解する必要がある、むしろそうするしか理解することが出来ないほど単純な論理ではないことを意味する。

西平は、「発達というものの見方を軸にしながら、人の一生を、プロセスとして・全体として視野に収める理論」（西平, 1993, p.78）を人間形成論とする。そして、その人間形成論の全体を構造化する理論の枠組みが、「＜発達を世代継承につなぐ論理＞＜発達を歴史につなぐ論理＞＜発達を自己超越につなぐ論理＞」（西平, 1993, p.78）という3本柱であると提示した。

西平は、人間形成論は、「人間存在論」「子どもの人間学」「発達心理学」「進歩」とも異なると主張している。また、人間は子どもから大人になった段階で発達が終

わるのではなく、大人になった後も発達し続けるとする。元々人間が持っている潜在的な性質が、生涯を通して、生涯のそれぞれの段階のなかで発揮されていくものとしている。一方で、賢櫛は、新たに西平によってエリクソン理論が検討され直されたからこそ、エリクソン理論から引き継ぐテーマがあるとする。それは、『衰退期』の発達が、『成長期』と同じ概念枠組みで語られているところに、エリクソン理論の限界があるのではないだろうか」（賢櫛, 1994, p.121）というテーマである。そこで、本論では、老いていく人間が、どのように発達という人間の可能性を発揮するのかについても視座を向ける<sup>14</sup>。

## 第2節 他者や社会と共に創り上げられる人間

人間は、生涯の段階の中で、葛藤し続け、葛藤を乗り越えまた次の葛藤へと移るなかで、自我を「他者」や「社会」<sup>15</sup>によって支えられることで、その生涯の段階のなかで自我の内側に生じていること<sup>16</sup>が望ましい比率<sup>17</sup>で危機を乗り越え、徳（virtue）を獲得する。<sup>18</sup>獲得された徳は、人間が「後に危機に出合う時、全体的な発達が傷つけられずにすむような助け」（西平, 1993, p.85）となる。

生涯を子どもや大人といった、ある定義をもってどこかで区分され、それぞれの区分された時期の間で発達を見るのではなく、子どもが大人になり次の世代へ繋

---

<sup>14</sup> 第2章2節のなかで、アンを育てるマリラとマシュウの変化から考察を試みる。

<sup>15</sup> 西平は、この場合「社会」を「拡大してゆく重要な他者の拡張」（西平, 1993, p.86）と位置付ける。

<sup>16</sup> エリクソンは、エピジェネティック図表を作成し、その図表のなかで、生涯のそれぞれの段階で自我の内側に生じる性質を定義した。例えば、乳児期は「基本的信頼対基本的不信」を定義し、この性質を「徳（virtue）」と呼び、「前進か退行か、統合か停滞かを決定する瞬間」を「危機」と呼んだ。その危機に直面した時に、前述の二つの性質は、対（vs.）ではなく、どちらとも自我の内側に生じる性質であるとし、それらを自らの内側に統合するという仕方で葛藤を乗り越えていくとした。（エリク・H・エリクソン／ジョン・M・エリクソン『ライフサイクル、その完結＜増補版＞』村瀬孝雄・近藤邦夫訳、みすず書房、2001年と、西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会、1993年を参照）

<sup>17</sup> エリクソンは、葛藤を乗り越える為に、自我のなかに生じる2つの徳は「対（vs.）」ではなく、望ましい比率であることが必要であると述べる。例えば先に例に出した基本的不信を自我違和感と呼ぶが、統合する際に、この自我違和感が全く無くなることを指すのではない。エリクソンは、この自我違和感が統合されるなかで、親和的と感じるようになることが、自我の強さと言われる徳であるとした。（エリク・H・エリクソン／ジョン・M・エリクソン、前掲書、2001と、西平、前掲書、1993を参照）

<sup>18</sup> 西平、前掲書、1993, pp.83-87を参照。

っていくといった大きな動きのなかで、西平は人間の生涯のなかでなされる発達を見る。西平は、エリクソン理論というのは、「どこから入っていても、その話の展開につられて既成の学問区分を超え出てしまい、生活世界やライフサイクルの全体を見渡す地平に連れ出されてしまうといった仕掛けになっているのである」（西平, 1993, p.3）と述べている。それは、エリクソン理論を単なる発達論と見るのではなく、その論理を考えることは「生」を考えるという大きな視野に導かれることを意味している。

以上の西平によって、新たに定義されたエリクソン理論の解釈から見えてきたものは、老いや弱さも含む人間の「生」全体を捉える新たな人間形成論と、『赤毛のアン』の登場人物たちと発達との重なり合いである。例えば、成人期もしくは老年期にあるマリラ・クスバートやマシュウ・クスバートが、アンを育てる経験を通して、島の人間とコミュニケーションを図れるようになったり感情を豊かに持てるようになったりする変化は、まさに生涯、人間は発達し続けるという西平の主張を私たちに想起させる。また、主人公アンが家庭や学校、島のコミュニティを通して、新しい自分を獲得していく姿も、「他者」や「社会」の支えがあって人間は、自我のなかにある過去に獲得された性質とともに、新しい自分を獲得するという人間形成のプロセスを想起させる。

序論で述べたように、多義的な読み方が出来る『赤毛のアン』に、立体的で大きな流れのなかで人間の発達を見、さらに同時に「生」を考えることの出来る人間形成論を新たに重ね合わせることによって、人間の発達の具体的な姿が現れ出ると考える。本論では、西平によって定義されている「エリクソンの発達論」と「エリクソンの自我論」から『赤毛のアン』を考察する。

## 第2章 発達と世代継承の関係

### 第1節 世代連鎖性—儀式化—

プリンス・エドワード島にきた当初、まだ11歳だったアンは様々な欠点を持っていた<sup>19</sup>。欠点を持ったアンが、マリラやマシュウ、周囲の人間によって支えられ、

---

<sup>19</sup> その欠点は、第2章2節で論じる。



その欠点を克服し成長していく姿が『赤毛のアン』のあらすじの大きな柱となっている。成長したアンは、養育される側からマリラを守る側に変化し、後に結婚をし、子どもをもうける。ここで、人間の発達を見る時、養育され子どもから大人に成長し、そして今度は守る側になるとはどのような意味が存在するのだろうか。

エリクソンは、ライフサイクル論を<sup>20</sup>定義した。そして、ライフサイクルという言葉に、「死によって完了する個人の生涯の持つ自己完結性」(西平, 1993, p.93)と、「前の世代によって生み出され、そして今度は次の世代を生み育ててゆく世代連鎖性」(西平, 1993, p.93) という2つの意味を持たせたと西平は述べる。しかし、その2重性は、「互いに相容れない2つのものの見方であった」(西平, 1993, p.95)と、西平は述べている。

西平は、エリクソンが定義した前述の2重性を、「世代継承 (generation)」(西平, 1993, p.95) という言葉で新たに定義しようとする。Generationという言葉は「世代」ではなく、「世代継承」と捉えるのは、エリクソンが『Insight and responsibility, 1965』(邦題『洞察と責任』)の中で記されていた原文<sup>21</sup>を、西平は次のように訳した理由からである。

それは、「幼児期と成人期とが、歯車のように噛みあいながら進みゆく人生段階は、世代を継承し、また再び継承してゆく1つのシステムである」(西平, 1993, pp.95-96)<sup>22</sup>という訳である。この意味合いから西平は、「世代」ではなく、ある世代から次の世代へと移り変わっていく「世代継承」<sup>23</sup>と捉えざるを得ないとしている。

アンは、マリラとマシュウによって養育される側から、のちに今度は目が不自由になったマリラを守る側に移行する。まず、アンは、マリラとマシュウによってどのような仕方で育てられるのかという視点から考察を行なう。マリラとマシュウは、

---

<sup>20</sup> エリク・H・エリクソン/ジョウン・M・エリクソン, 前掲書, 2001のなかでエリクソンは、人生を「乳児期、幼児期初期、遊戯期、学童期、青年期、前成人期、成人期、老年期」の8つの段階に分けそれぞれの段階で、発生する課題と得られる要素があるというライフサイクル論を定義した。

<sup>21</sup> The cogwheeling stages of childhood and adulthood are, as we can see in conclusion, truly a system of generation and regeneration. (西平, 1993, p.95) 本原文は、"Insight and Responsibility, 1965" (エリク・H・エリクソン『洞察と責任』)からの引用であるが、原文入手が困難なため、西平直『エリクソンの人間学』からの二次引用とする。

<sup>22</sup> 西平が新たにエリクソンの原文を本書のなかで、訳し直している

<sup>23</sup> 言葉の捉え方について論じている箇所は、「」を付記する。

アンに家族という温かい居場所を与えていく。アンは、島に来るまで家族を転々としており、他者から愛情を与えて育ててもらうことがなかった。アンは、島に来て『子どもの社会化』と『成人のパーソナリティの安定化』(池田, 2008, p.55)といった「普遍的な家族の根基機能」(池田, 2008, p.55)を果たすマリラとマシュウによる家族を構築するのである。アンは、家族との情緒的な結びつきのなかで、しつけや社会化の教育を受ける。アンは、「自分が帰る場所があるのはうれしい事ね」という発言や、マリラとマシュウがアンから期待されることを喜びと感じ、これまでに経験したことのない温かい居場所を与えられる。

西平は、エリクソンの論理のうち、次のことに着目する。それは、子どもから親へと発達していく過程の人間の共同体が、「儀式化 (ritualization)」(西平, 1993, p.111)を通して、「個人は(中略)共同体の世界観に適応し、他方、共同体の方は、(中略)成員を共同体のなかに組み入れてゆく」<sup>24</sup>(西平, 1993, p.112)という点である。

この儀式化とは、「しつけの仕方に始まり、挨拶の仕方や食事のマナー、日常生活のあらゆる習慣」(西平, 1993, p.112)を含み、パターンを創造的に定型化するプロセスを意味している。そして、「子どもを教育するという場面に即して言い換えれば、放任でもなく、抑圧でもなく、子どものうちから溢れるエネルギーを一つの型に適応させてゆく『創造的形式化』」<sup>25</sup>(西平, 1993, p.112)を「教育」という儀式化で考えた。

人間は、生活の流れや思考の方法がパターン化されることによって、個々人で生きていた世界から、人と共に生きていく生活へと同化される。アンは、グリーン・ゲイブルスのマリラとマシュウから成る家族のなかに組み込まれる。やがて、アンにとって、マリラとマシュウの存在が家族つまり、共に生きていく共同体であると互いに認識する。西平は、「日常生活における儀式化を通して、共同体の世界観に適応し、他方、共同体の方は、儀式化を通してその成員個々人のなかに共通の世界観を

---

<sup>24</sup> エリクソンは、「われわれが儀式化を、自我の時空定位の能力とひとつの社会を支配する(またはそのなかで競合する)世界観との間を繋ぐひとつの主要な絆と考えている(後略)」(エリクソン・H.『玩具と理性』近藤邦夫訳、みすず書房、2000年、p.92)と述べている。

<sup>25</sup> エリクソンは、「(中略)儀式化は、衝動的過度と強迫的自己抑制、社会アノミーと道徳主義的強圧の両者を回避するのに役立つ創造的形式化を表す」(エリクソン, 2000, p.90)と述べている。

移し入れ、成員を共同体のなかに組み入れてゆく」(西平, 1993, p.112) といった儀式化が果たす役割を説明する。アンは、嘘をつかないなどの道徳観、一日の生活の流れや仕方、人との約束を守ること、といった他者と共に生きていくために必要な儀式化を身に付けることで、自らがあらゆる生活<sup>26</sup>に溶け込み、同化することを可能にしたと言える。

## 第2節 世代連鎖性—相互補完—

第1節では、マリラとマシュウがアンに与えた教育という儀式化について見てきた。本節では、共同体(社会)としてのプリンス・エドワード島がアンに何を与え、そして、アンは共同体(社会)に何を与えたのかについて考察する。西平は、社会と子どもとの関係性を相互補完的な関係と述べ、その相互補完的な関係こそ「自我の統合にとっても、社会組織にとっても、共通のより大きな潜在力を提供する」(西平, 1993, p.120) と指摘する。ここで述べられる相互性、または相互補完的な関係を、アンと共同体(社会)としての島との間で読み取ろうと試みる。

島に来た当初、アンは大げさな感情表現の持ち主であり、癇癪持ちで、コンプレックスも克服出来ずにいた。これらの欠点を抱えたアンに対し、共同体(社会)としてのプリンス・エドワード島は何を与えたのだろうか。その答えは、「共同性」、「教育」である。共同性とは、儀式化の教育のなかで述べたように、人々のなかに同化し共に生きていくことである。アンは、プリンス・エドワード島のアヴォンリー<sup>27</sup>という地域に溶け込み、地域の人々と共存することを学ぶ。アンは、古くからの島の定住者であるリンド夫人に、地域のなかに溶け込み、島の立派な一員であるとアンを認めさせるまでになる。

島がアンに与えた「教育」とは、第一節で述べたように、家庭のなかでの教育と学校教育である。マリラは、アンに家庭における生活の指針を見せ、また地域や学校などの外の世界との接点を与える父性の役割を果たした。更に、マリラの父性の役割は、アンが前へ進むための原動力となったと言えるだろう。一方でマシュウは、コンプレックスを抱えたアンのすべてを肯定し愛することで、安全基地としての母

<sup>26</sup> 生活が指すものとは、家庭生活だけでなく、学校生活のような共同体の空間も同時に指す。

<sup>27</sup> マリラとマシュウが暮らす地域を指す。

性の役割を果たした。と同時に、マッシュウは、参政権を行使することで、外の世界へと手引きする父性の役割をもアンに対して果たしたと言える。

では、アンは共同体（社会）という島に何を与えたのだろうか。アンは、マリラやマッシュウの教育や母性、父性の発揮によって成長していくが、同時にマリラやマッシュウの言動にも変化が表われる。西平は、次のように述べる。「大人は、子どもによって動かされつつ、子どもを育てることによって自ら成長し、子どもは、親によって育てられることを通して、親を成長させつつ、自ら成長してゆく」。(西平, 1993, p.101) つまり、相互性を主張する。マリラとマッシュウは、アンへ儀式化された教育と母性、父性を与えた。そして、アンを立派な大人へと成長させていく。一方で、マリラとマッシュウも、同時にアンを育てる経験を通して、心の成長を遂げる。

次の世代つまり、アンの世代に教育するマリラとマッシュウの役目は、アンが大人の階段を上がると同時にいつしか終わりを告げる。それは、次の世代のアンに「世代継承」されたことを意味する。アンが大人になることは、月日が経つことも意味する。更にはマリラとマッシュウが、いつのまにか年齢を重ねていくことも同時に意味する。そのことは、時を経てマッシュウが心臓発作で亡くなり、目の不自由なマリラを助けながらグリーン・ゲイブルスでマリラと共に生きていこうとするアンの姿が、その「世代継承」を示していると言える。

### 第3章 発達と歴史の関係

私たちは、生きる時代の定められた社会のなかで生きていく。そして、人は、その時代の制度、思想、法律、風潮などの枠組みの中で生きていく。時に、人はその時代に疑問を呈しながら、新しい時代を創りあげていこうとする。そして、私たちが、のちに生きた時代を振り返るとき、既にそれは過去となり、歴史となる。

西平は、「一人一人の人間が歴史を創りあげている」(西平, 1993, p.141) と述べ、人間存在の在り方そのものが、「歴史のなかで歴史に動かされながら歴史を動かしてゆく」(西平, 1993, p.141) と主張する。以上を踏まえ、本章では、アンがどのような時代の規定性のなかで生きようとし、更には、どのような歴史を新たに創り上げようとしたのかに着目し考察を試みる。

## 第1節 新しい歴史の予感

『赤毛のアン』には、性差にまつわる場面が多く登場する。アンは、どのような性差観の時代のなかで生きたのだろうか。その性差観を、いくつかの場面から読み取ろうとする。

例えば、アンが、マシュウと選挙権について会話をする場面がある。リンド夫人は、もしも女性に選挙権があったならば、既に社会は良い方向にすっかり変わっていると公言する。しかし、実際のプリンス・エドワード島では、「全ての女性に参政権が与えられるようになるには長い時間がかかった」。(白井, 2008, p.34) そして、21歳以上のすべての島の女性に選挙権が与えられた<sup>28</sup>のは、『赤毛のアン』の出版から、14年後の1922年のことだった。

また、マリラとマシュウは、当初男の子を欲していた。次に、アンと親友のダイアナとのキャラクター性の大きな違いである。アンとダイアナは、対照的な女性として描かれる。一方で、アンは、男の子のギルバートをライバルとして位置付け、対等に競い合う。

『赤毛のアン』に数多く登場する性差の場面は、アンが生きた時代の規定性を物語る。その規定性とは、女性の権利の低さである。そのことが古い歴史として島の社会に存在する。しかし、アンはその古い歴史に屈さない。むしろ、アンはその古い歴史を自らの前に現れ出た壁として、自らの力で乗り越えようとする。それは、アンが性差を乗り越えてギルバートと固い友情を築いたことが、最たるものである。

ダイアナは、伝統的で自ら新しい道を切り開くことの無い女性を選択した。しかし、アンは伝統的な女性とは真逆の道を行く。そのことは、人間が生きていくこと自体、新しい歴史を創り上げることであると同時に、アンが選択した道は、過去の歴史に囚われることのない真の意味で新しい歴史を創り上げることが意味したのである。

モンゴメリが『赤毛のアン』を執筆した1800年代後半そして、『赤毛のアン』が出版された1908年という女性の地位が低かった時代に、アンが男性と対等に生きようとする姿は、その後の新しい時代を予感させるものだったと言える。

---

<sup>28</sup> 白井澄子「カナダおよびプリンス・エドワード島の歴史と文化」桂宥子・白井澄子編『シリーズ もっと知りたい名作の世界⑩ 赤毛のアン』ミネルヴァ書房、2008年、p.34を参照。

## 第2節 新しい歴史の提示—学校の先生を目指すこと—

マリラは、アンに学校の先生の免状を取得するために、クイーン学院への受験を提案する。アンにとって、クイーン学院へ行って先生になることは、「それこそ、あたしの生涯の夢」(“It's been the dream of my life”) (モンゴメリ, 2008, p.417)

(Montgomery, 2007, p.195) だった。アンは、マリラに「あたし、先生になりたくてたまらないわ」(“I'd love to be a teacher.”) (モンゴメリ, 2008, p.417) (Montgomery, 2007, p.195) と告げる。

一方、アンの親友ダイアナは、両親の考えの元、クイーン学院への入学試験を受けることを断念させられる。ダイアナの両親は、ダイアナを「クイーンにやる気がなかった」(モンゴメリ, 2008, p.419) のである。

アンは、なぜ学校の先生を目指したいと考えるようになったのだろうか。それは、ミス・ステイシー先生との出会いがきっかけとなる。アンは、ステイシー先生について、「ミス・ステイシーのような先生になりたいってことは価値のある目的だわね」(モンゴメリ, 2008, p.418) と語る。そして、学校の先生という職業について、「とても気高い職業」(“it's a very noble profession”) (モンゴメリ, 2008, p.418) (Montgomery, 2007, p.196) と高く評価する。

ステイシー先生の指導方法は、素晴らしいものだった。ステイシー先生は、「古い、踏みなされた道から外へ進み出て行くように」(“straying from the old beaten paths to a degree”) (モンゴメリ, 2008, p.434) (Montgomery, 2007, p.203) と、現状に留まらず、新しい道を歩むことを恐れないように指導をした。つまり、このことは、古い歴史に囚われることなく、新しい歴史を創り上げていくことの必要性を説いていると言えよう。そして、ステイシー先生は、アンに「どんな理想をもつかということは、とても重大」(モンゴメリ, 2008, p.412) と教え、目標を持つことの重要性を教えるのである。

このように、ステイシー先生は、生徒に信頼される人物としてアンの近い場所に存在し、アンのロールモデルであったと言える。そして、アンは、ステイシー先生との出会いによって、既にある道ではなく、自らの手で新しい道を切り開くことを教わる。

では、ここで西平の「一人一人の人間が歴史を創りあげている」(西平, 1993, p.141) ことに着目する時、アンが学校の先生を目標とし、更には当初クイーン学院

に留まらずエイヴリー奨学金を獲得し、レドモンド大学を目指すといったことは、どのような意味を持つのだろうか。

1 つは、アンが学校の先生を目指すこと、更には高等教育を目指すことは、女性のアンが、性差を越えた新しい歴史を創り出すことである。女性に参政権も与えられず、女性が高等教育を受けることさえも珍しかった時代に、アンが学校の先生さらには高等教育を目指すことは、プリンス・エドワード島の人々にとって驚くことだっただろう。

ステイシー先生が、アンにクイーン学院を勧め、学校の先生となる道へ導いたことで、アンは、学校の先生の免状を取得するためにクイーン学院へ進むことを決意し、更には女性が、高等教育を受けることが珍しかった時代のなかで、レドモンド大学への進学を目指すという新しい道を切り開こうとしたのである。

アンが教師を選択する意味の 1 つは、性差を超えた新しい歴史を創り出すことだった。そして、2 つ目は、全ての人間が性差に関係なく平等に与えられるべき教育を施すといった教師の役割をアンが担うことに意味を見出せる。それは、アンが今後の時代を担う子どもたちの未来に大きく関わりそして社会を決定づけ、歴史をも創り上げることを意味した。

人間が発達をする過程のなかで創り上げられるものは、のちに振り返ると新たな歴史となる。アンが、男性のギルバートと性差を超えて固い友情を築くこと、教師という歴史の生成を担う職業を自ら選択すること、高等教育を受けることを目指すことは、新しい歴史をアンが創り上げることを意味するのである。

## 第 4 章 発達と自己超越の関係

1908 年に『赤毛のアン』が英語圏で出版された当時、アメリカ文学界の文豪マーク・トウェインは、モンゴメリに次の言葉を送りアンを褒め称えた。

“ the dearest, and most lovable child in fiction since the immortal Alice ” (桂, 1991, p.89)

上記を訳すと、(アンは)「不滅のアリス以来の最愛の人であり、そして最も愛すべ

き子ども」である。その頃の書評者の多くは、アンについて『風変りな子、想像力の固まり』等と、強烈な個性の主人公の創造に注目している」。(桂, 1991, p.87) このようにアンについて、マーク・トウェインは愛すべき子どもと褒め称え、また他の書評者の多くが「想像力の固まり」と評す理由には、アンの想像力豊かな人間性にあるだろう。

アンは、マリラやマッシュウと出会うまでの孤独な生活を想像力によって乗り越えてきた。アンのこのような想像力に着目するとき、想像力とは人間の発達においてどのような役割を果たすのかという疑問が起こる。この疑問点を検討するため、まず西平の人間形成論を見ることから始めたい。

西平は人間の発達を見ると、これまで見てきた「世代継承」や「歴史」と同時に「(中略) 自己超越を一人の人の発達の中に立体的に重ね合わせることによってのみ、はじめて人の発達が全体として見えてくる」(西平, 1993, p.160) と主張する。西平は、エリクソンが「時折使う transcendent<sup>29</sup>という言葉に注目」(西平, 1993, p.150) し、その言葉を新たに「自己超越」という言葉に置き換える。そして、西平は、「自己超越」という言葉について「人が<自分を超越でてゆく>という仕方で新しい<わたし>に出会ってゆく、というそのダイナミズム」(西平, 1993, p.151) という意味を持ち、「自己超越」自体が発達であると述べる。

では、自己超越とは一体何だろうか。自己超越の姿とは、「自分を超越出てゆくという仕方で生き生きしてゆく姿」(西平, 1993, p.170) を意味する。さらに詳しく述べると、その姿とは「作りごと (make-believe) によって『現実』の危機を乗り越えることができ、それこそが、人生初期における遊び心 (playful) の姿」(西平, 1993, p.170) と述べる。この作りごととは、子どもの遊びを意味し、子どもの遊びとは「ある事態の雛形を創造することによって経験を処理し、また実験し計画することによって現実を支配するという人間の能力の幼児的表現形式である」。(エリクソン, 1977, p.284)

西平は作りごと、つまり、仮構の世界が、現実か否かという点にエリクソンが着目したことに触れ、「(中略) 遊戯的想像力と事実に現実とが相互に他を正当と認めること」(エリクソン, 2000, p.21) こそ、人は生き生きすると主張する。つまりは、

---

<sup>29</sup> Transcendent とは、「超越的な」という意味。(小西友七編集主幹『ジーニアス英和辞典<改訂版>』大修館、1998 年)



子どもは、遊ぶことで経験する仮構の世界によって、新しい世界を経験し、現実と新しい世界とを相互に行き来し、新しい自分に出会う。これを西平は、自己超越と呼んだのである。

ここで着目したいこととは、子どもが、新しい世界を経験するこの“遊ぶこと”と子どもが持つ想像力との深い関係性<sup>30</sup>である。遊びと幼児の発達について研究を行なった鈴木忠は、エリクソンが「成長していく幼児の遊びは、(中略)種々の役割とヴィジョンの支配と指導下に置かれた実存の内部で、想像的選択の活動余地(leeway)を経験する訓練場である」(エリクソン, 2000, p.85)といった視点に着目する。つまり、遊ぶこととは、想像力を使い現実で起きうる様々な役割や状況をその遊びのなかで経験することである。そして、仮構世界は現実世界へと移行する子どもの訓練場となり、そこで得た経験が現実で活かされていくのである。

以上のことから、本章では自己超越の視点から想像力を見るのではなく、想像力から考察を進め、人間の発達の一つである自己超越を考察する。さらに、西平はエリクソンが自己超越を遊びの領域と同時に、「宗教的である」領域からも語っていたことに着目する<sup>31</sup>。したがって、自己超越を想像力からの視点と、「宗教的であること」(西平, 1993, p.160)という視点からの以上の2つの視点から考察を試みる。

## 第1節 新しい世界へと導く想像力

アンは生きていく上で想像力を巧みに使用する。アンは、プリンス・エドワード島に来る前にトマス家とハモンド家で引き取られていた頃、架空の友人を創る。しかし、池田は特にアンが想像の中で親友を持つことについて「辛い現実からの逃避」(池田, 2008, p.54)であると主張する。池田が「逃避」と主張するその理由は、「アンには、空想の世界から現実世界に戻ってきた時、自分のために用意された温かな居場所がない」(池田, 2008, p.54)からである。

---

<sup>30</sup> エリ・エス・ヴィゴツキーは、エリ・エス・ヴィゴツキー『新訳版 子どもの想像力と創造』広瀬信雄訳、新読書社、2002年のなかで、「虚構を求める子どもの志向は、遊びと同様、想像力のなせる活動」(p.15)と述べている。つまり、“遊び”と“想像力”は、子どもが新しい世界を経験する上で深い関係性を持つ活動であると言える。

<sup>31</sup> 西平は、エリクソンが自己超越について「一見奇妙なことに、宗教的であること (to be religious) と、遊び心を持っている事 (to be playful) という二つの異なる領域 (後略)」(エリクソン, 1993, p.160)で語っている、と指摘する。

では、このアンの空想は逃避なのだろうか。確かに、空想が人間を陥れる妄想へと変化したとき、それは逃避となる。だからこそ、西平は、現実と遊び心の想像力の世界が、「互いに制約しつつ」（西平, 2008, p.170）あることに特に注意を向ける。さらに、西平はエリクソンが「＜遊びが人をだましてしまう危険性＞」<sup>32</sup>（西平, 2008, p.172）について着目したことに触れ、遊び心の想像力で創り上げた世界が、人の手を離れて勝手に実体化されることに危険性を孕むと述べている。あくまでも、遊び心の想像力は、現実を主とし、現実を生き生きとさせるための裏方でなければならない。

その点を更に考察するため、ここでエリ・エス・ヴィゴツキー<sup>33</sup>の子どもの想像力についての理論をここで用いたい。ヴィゴツキーは、空想と現実が対置されることは誤りとし、想像で生み出されたものは、すべて「（中略）現実にある要素や人間の過去経験にふくまれている要素で組み立てられている」（ヴィゴツキー, 2002, pp.18-19）とする。つまり、想像とは現実や、以前に誰かが経験した体験や歴史に依存するのである。

想像と現実が、密接に繋がっているという点について更に理解を深めよう。人間の活動には、次の2つの活動がある。1つは、「再現的（中略）活動」（ヴィゴツキー, 2002, p.8）と、そして2つ目が「（中略）創造する活動」（ヴィゴツキー, 2002, p.10）である。この2つ目の創造する活動とは、過去に経験した感情や行動を活かし想像力によって新たな創造を生み出す活動である。想像力を使って、ただ何もないところから新たなものが創造されるのではなく、自らの体験や周囲の人から聞いた経験が土台となって生み出されるのである。そして、「人間の創造的な活動こそが人間が未来を向いていて、未来をつくりだし、自らの現状を変えるような存在」（ヴィゴツキー, 2002, p.11）なのである。

ここまでの理論をアンと重ね合わせて考察するとき、アンの想像力を使った創造は、寂しい現実から自らを脱却し、前を向くための原動力となったと言える。

---

<sup>32</sup> エリクソンは、ラテン語の「遊ぶ」*ludere* という語そのものが「人間の遊戯性が或る時は人間を錯覚に陥し入れ、また或る時は人間の ファンタジー 空想を妄想に陥し入れることを暗示している」（エリクソン, 2000, p.57）と指摘する。

<sup>33</sup> エリ・エス・ヴィゴツキー（1896-1934）は、子どもの想像力について研究を行なった人物である。そして、ヴィゴツキーは、想像あるいは空想と現実との関係性を理論化した。

そして創造活動は、想像によって生まれた現実と結びつきのある新しい世界へと私たちを導き、再び想像力を使って自分に返すのである。これが、西平の述べた仮構と現実とを「自在に往き来してこそ、ひとは生き生きする」（西平, 1993, p.170）ことなのである。ヴィゴツキーが、想像力とは、「人間の行動や発達においてきわめて重要な機能を獲得しており、それは人間の経験を拡大する手段」（ヴィゴツキー, 2002, p.25）と主張するように、想像力による創造活動は新しい自分へとの出会いを可能にさせる。

アンの空想の友達を持つことや物語を創り出すことは、想像遊びの部類の活動となる。この想像遊びの経験を通じて、アンは他者の存在を想像し他者との関わり合い方を学ぶ。遊びを通して表れる想像力について何百人の子ども対象に研究したアメリカの研究者ドロシー.G.シンガーとジェローム.L.シンガーは、想像遊びについて次のように述べる。

（中略）他者を含める能力、物をその遊びをするのに必要な要素に変換する能力、（中略）さらに連続的な流れ、あるいは秩序に従う活動やテーマにかかわる能力を通して発達する。（D.G.シンガー・J.L.シンガー, 1997, pp.94-95）

想像遊びの経験を通して、人間が発達することに着目するとき、たとえば、アンの架空の友人との別れの場面<sup>34</sup>がある。アンは、友人と別れる辛い経験を体験する。しかし、アンと架空の友人の間には強い信頼感で満たされているのである。アンが、信頼関係にあった架空の友人と別れることは、空想上の友人を断ち切ることである。これは、アンの空想がコントロール不能状態ではないことを表し、アンが主となり空想を自らのうちに収めていることを意味する。さらに、これは西平がエリクソンの理論で着目した「＜遊びが人をだましてしまう危険性＞」（西平, 1993, p.172）を克服していることを示す。

さらに述べると、アンがトマス家を離れる際にそこで創った架空の友人とお別れをしたことや、アンのコンプレックスの赤毛だけは、想像力を持ってしても目を背

---

<sup>34</sup> モンゴメリ, 前掲書, 2008, p.103 での場面。

けることが出来なかった<sup>35</sup>ことなどは、これまでアンが幾度となく往来した現実と仮構の世界との境には、明確に境界線が引かれていたことを意味する。前述したように、池田はアン为空想が逃避であるとする理由にアンには居場所がなかったことを挙げる<sup>36</sup>が、確かにアンには温かい居場所がなかったかもしれない。しかし、現実の現実と仮構の世界を行き来するなかで、アンは現実世界を明確に持ち、現実世界と仮構の世界との線引きがなされていた。これは、池田の述べる「逃避」でもなくまた、西平の述べる「仮構の世界の実体化」でもない。

想像遊びとは、現実世界での経験を原動力として新たな創造を生み出し、今ある私たちを超えて新たな世界へと導く。これは、人間の創造活動であり人間が発達するなかで新しい自分へと出会う。これが、つまりは自分を超え出てゆく自己超越であり、アンが発達した1つの要因である。アンは、想像力によってなされた仮構世界での経験が、アンによって現実に活かされ、その役目が終わるとその仮構世界は一旦終わりを告げる。アンに、現実の友人ダイアナが出来た以降、架空の友人を創ることはなかったことがそれを表している。人間は現実と、現実と続きになった仮構世界とを往復し、その仮構世界での経験が、現実に生きる自分にいずれ活かされていくのである。

## 第2節 究極的な他者との出会い

第1節で前述のように、自己超越とは、「現実を超越してゆく」(西平, 1993, p.160) ことである。これを、第1節では、想像力から考察を行なったが、本節では西平が着目したエリクソンの述べた「宗教的であること (to be religious)」(西平, 1993, p.160) にも注意を向ける。エリクソンは、前述の想像遊びと同時に、自己超越とは宗教的であるといった領域からも語られている。

宗教的であることと自己超越を結びつけるとき、西平は、エリクソンの次の言葉に着目する。エリクソンは、自分と他者との関係性に目を向け次のように述べる。

人間存在の統合は、(それが特定宗教を意味しようとしまいと) 宗教的

---

<sup>35</sup> モンゴメリ, 前掲書, 2008, p.33 の場面。

<sup>36</sup> 池田幸代『『赤毛のアン』にみる、家族の育児機能と成長に関する一考察』『上智社会福祉専門学校紀要 第3号』上智社会福祉専門学校、2008、p.54 を参照。

であると言えるだろう。それは、神秘的・究極的な他者を内的に探し求め、心を通わせようと願うことのなかで為されうる。(西平, 1993, p.161) <sup>37</sup>

エリクソンは、「自己超越の超越してゆく方向が(中略)『究極的な他者』との出会い」(西平, 1993, p.162) となることを目指していた。ここで述べられる究極的な他者を西平は、「(中略) 互いに分かち合える<他者>なくして<わたしたち>は成り立たない」(西平, 1993, p.162) <sup>38</sup>と解釈した。

究極的な他者を、『赤毛のアン』の登場人物へと視点が向けられるとき、それはアンの親友ダイアナを指す。アンにとってダイアナという存在は、マリラやマシュウとは異なる。その相違点は、アンが、マリラやマシュウには相談出来ない事をダイアナには打ち明けられる点にある。

マシュウの死によって、深い悲しみにくれたアンは、常に味方であったダイアナつまり、究極的な他者との出会いによって、立ちすくむことなく、前を向くことが出来た。この究極的な他者との出会いは、今のアンを超え出てゆくことであり、新しい自分との出会いを果たしたと言える。これこそ、西平の述べる「今ある自分を超え出てゆきながら、より新しい自分に出会ってゆく」(西平, 1993, p.152) といった自己超越である。以上のように、人間の発達において、1 節で論じた想像遊びと、本節で論じた超越的な他者という二輪が自己超越へと導くのである。それによって、アンは現状で歩みを止めることなく、成長した自分との出会いを果たしていくのである。

## 第5章 アイデンティティ

ここまで、アンの発達を世代継承、歴史、自己超越の3つとの関係から考察を行なった。だが、人間の発達を見るとき、それだけでは不十分である。西平の人間形

---

<sup>37</sup> 本箇所は、映画『野いちご』を素材として執筆されたエリクソンによる論文“Adulthood: collected essays, 1978”からの翻訳後の引用である。該当論文が入手困難であったため、西平の文献より二次引用とする。

<sup>38</sup> 註37に同じ。

成論は、発達が世代継承、歴史、自己超越と密接に関係し、それらがアイデンティティの形成へと繋がることを示唆した。その理由は、エリクソンの理論自体がアイデンティティ理論とも呼ばれることにあるだろう。

そこで、アンのアイデンティティ形成を西平の人間形成論で読み取ろうと試みる。アンは、11歳のときプリンス・エドワード島に来た。そして、月日経ち、アンは16歳になった。『赤毛のアン』のなかで児童期・青年期<sup>39</sup>という多感な時代を生きたアンは、どのようなアイデンティティを形成したのだろうか。

この問いを検討する前に、『赤毛のアン』の結末を先に見てみよう。前述のように、アンは、レドモンド大学への進学をマッシュウの死により諦める（アンは、結果的にレドモンド大学で学ぶ予定だった課程の勉強を独学ですると決意する）。なぜならば、アンは目の不自由なマリラだけをプリンス・エドワード島に残したまま、自分だけが島外に出ることは出来ないと思ったからである。それを知ったマリラは、自分のためにアンを犠牲には出来ないと告げた。だが、アンはマリラに次のように告げる。

「ちっとも犠牲じゃないことよ。(中略) あたし、もう決めたのよ、マリラ。レドモンドへは行かないわ。ここに残って先生になるの。(後略)」  
(モンゴメリ, 2008, pp.515-516)

“There is no sacrifice. (中略) My mind is quite made up, Marilla. I'm not going to Redmond; and I am going to stay here and teach. (後略)” (Montgomery, 2007, p.240)

アンは、島に残るという決断を、初めてアン自らが下す。目が不自由になりつつあるマリラを一人でグリーン・ゲイブルスに残すことは出来ない、という考えから、アンはそのような決断をするのだ。だが、これは自分の為の選択でもあった。アンは、「ちっとも犠牲ではない」と断言し、自らが決断した結果だと言う。大人になっていくことを自覚したアンは、たった一つの道を選び取り同時に、必然的に他のも

---

<sup>39</sup> 本箇所は、エリク・H・エリクソンによる、人生を8つの段階に分けたライフサイクル論に基づく。

のを捨てるという勇気を持った。

ここで、これまでのアンの目標に焦点を合わせてみよう。クイーン学院に入学後、アンの目標は、クイーン学院の「(中略) 一年のおわりに一枚の地方教員の免状と、それにたぶん金メダル<sup>40</sup>をも受けることだった」。(モンゴメリ, 2008, p.480) しかし、アンがエイヴリー奨学金の存在を知った後、アンの目標は変更される。アンにとっての次なる目標は、エイヴリー奨学金を獲得しレッドモンド大学に入学することだった。

しかし、アンは、ここまで熱望し達成されかけたその目標を、マッシュウの死によって断ち切ってしまうのである。ここで、本章では、本章の冒頭で前述の「どのようなアイデンティティを形成したのだろうか」とともに、アンが達成されかけた目標を自らの手で断ち切った事実の裏で、アンのアイデンティティに何が起こったのかを併せて検討していく。

## 第1節 アンの否定的アイデンティティ

アンが、プリンス・エドワード島から再び孤児院へと返されそうになっていた頃のことである。海岸通りを飛ぶかもめを見たアンは、次のようにマリラに話す。

(中略) あのかもめ、すばらしいわね。小母さん、かもめになりたいくない？ あたしはなりたいたい—もし人間の女の子になれないとしたらね。(中略) 日の出といっしょに起きて (中略)、あの美しい青い海の上を遠くまで飛んで夜は自分の巣へ帰ってくるなんて、すてきだと思わない？ (後略) (モンゴメリ, 2008, p.76)

アンは、青い大空を飛び、夜には自分の帰る場所へ戻ってくるかもめを見て、居場所が無い自分と居場所があるかもめとを重ね合わせた。さらに、アンの発した「もし人間の女の子になれないとしたらね」(“If I couldn't be a human girl.”) (モンゴメリ, 2008, p.76) (Montgomery, 2007, p.41) という言葉は、アンが未だ何者にもなれていないことを意味する。つまり、プリンス・エドワード島を初めて訪れた頃

---

<sup>40</sup> 最も良い成績を収めた者1名にクイーン学院から贈られるもの。

には、アンはまだ人間の女の子になることが出来ずにいたのである。

当初、このように語っていたアンは、どのようにアイデンティティを形成するのだろうか。ここで、本来であれば、はじめにアイデンティティとは何かという点から始めるのが筋だろう。しかし、本節ではアイデンティティの言葉が持つ側面から考察を進め、アンが形成したアイデンティティの本質へと考察を試みる。

そのアイデンティティの言葉が持つ側面とは、「他人の墮落に依存して生きてゆくことがよくあるという不愉快な事実」（エリクソン, 1982, p.424）である。そのことを西平は、次のように着目する。

（中略）差別感覚や偏見が、実は自分のアイデンティティを補強することと裏表一体をなしてきたということ、そのアイデンティティを確固としたものとするために、人間はしばしばこの排他性を必要としてきた（後略）。（西平, 1993, p.243）

この「否定的アイデンティティ<sup>41</sup>」（エリクソン, 1982, p.239）をアンに重ね合わせるとき、アンとギルバートの関係性が浮かび上がる。アンは、ギルバートにコンプレックスをひどい仕方で指摘されて以降、ギルバートをライバル、いやむしろ憎悪<sup>42</sup>を含んだ敵対の相手として位置付ける。一方、それは、アンがギルバートとクイーン学院卒業後に和解し、友情の証として固い握手を交わすまで続く。

アンがギルバートに対して持つこの憎悪は何を意味するのだろうか。アンは、ギルバートよりも成績をはじめとした競争において優位に立つことに重きを置く。これこそが、アンのアイデンティティの一部だったのである。アンがギルバートよりも優位に立つということによって、アン自身のアイデンティティを補強した。アンは、否定的アイデンティティつまり、疑似的なアイデンティティを構築したのである。

前述の西平が述べた「排他性」（西平, 1993, p.243）をアンに重ね合わせるとき、

---

<sup>41</sup> エリクソンは、否定的アイデンティティについて「発達の危機的な段階において、最も危険で望ましくないもの、にも拘わらず最も現実的なものとして提示されたすべての同一視や役割に、基礎づけられた倒錯したアイデンティティ」（エリクソン, 1982, p.239）と定義する。

<sup>42</sup> アンは、「残念ながら恨みを根にもつたち」であり、ギルバートへの「憎しみも強かった」。（モンゴメリ, 2008, p.238）



アンはギルバートに対して排他性を持つことによって、「あなたとは違うわたし」を創り上げた。そして、「あなたとは違うわたし」という排他性によって、アンは擬似的なアイデンティティを創り上げた。この排他性を持つことは、アイデンティティを構築するうえで、「不可避の運命」(西平, 1993, p.244)なのである。

そして、自分とは異なる誰かに対して優越性を感じ自分を再確認するという機能を、「疑似種」(エリクソン, 1982, p.43)が背負わされる<sup>43</sup>。エリクソンが名付けたこの「疑似種」を、西平は「差異」(西平, 2008, p.243)と呼んだ。アンはこの「差異」をギルバートとの関係性で生み出した。そして、優越性を再確認させるギルバートとの差異によって、アン自身のアイデンティティが補強され、アンは否定的アイデンティティつまり、擬似的なアイデンティティを獲得したのである。

## 第2節 自分を受け入れるアン—居場所の獲得と他者からの承認—

では、アンの否定的なアイデンティティは、どのように変化していくのだろうか。そこで、もう一度、本節の冒頭で前述したアンが海岸通りでかもめを見たときに発した次の言葉に着目してみよう。アンは、かもめを見て、「(中略)夜は自分の巣へ帰ってくるなんて、すてきだと思わない? (後略)」(モンゴメリ, 2008, p.76)と発した。アンは、かもめが夜になると帰る場所である、「自分の巣」つまり、かもめの持っている「居場所」を羨ましいと感じた。つまり、アンは、自分の居場所を求めているのである。

それからしばらくの月日が経ち、アンがグリーン・ゲイブルスや学校での生活にも慣れたある日のことである。ダイアナからアヴォンリーから30マイルも離れたシャーロットタウンにある、ダイアナのジョセフィン叔母さんの家に泊まりに来ないかと誘われ、アンはシャーロットタウンでダイアナと楽しい日々を過ごした。その帰り道、「アンとダイアナは楽しく家路を走って行った (後略)」。(モンゴメリ, 2008, p.407)そして、グリーン・ゲイブルスに帰ってきたアンは、「しみじみ (後略)」(モンゴメリ, 2008, p.408)と次のようにつぶやくのである。

---

<sup>43</sup> エリクソンは「(中略) 疑似種のそれぞれに、すべての他者にたいするその優越性を再確認するという機能を、背負わされてきているのだ」(エリクソン, 1982, p.43)と述べる。

「ああ、生きているってありがたいこと。家へ帰るってうれしいものね」(モンゴメリ, 2008, p.408)

アンは、自分の安心出来る帰る場所があることに強い喜びを感じるアンは、いつもアンの傍に寄り添うマリラとマシュウの2人が待っている場所、つまり“グリーン・ゲイブルスという居場所”を見つけたのである。

では、ここで前述の「アンのアイデンティティは、どのように変化していくのだろうか」という問いに答える前に、そもそもアイデンティティとは何かという問いに引き返す。アイデンティティとは、「(中略)何かと何かの合致(後略)」(西平, 1993, p.192)である。つまり、アイデンティティとは、「自分が自分であることであり、前者の自分と後者の自分が同じであり、イコールで結びつけられること(後略)」(小沢, 2004, p.83)である。このことを一般的に「同一性」(西平, 1993, p.191)などと呼ばれる。

さらに、これまで論じてきた居場所とアイデンティティとの関係性に着目しよう。

“自分はどこに属する者かという問い”つまり、“自分はどこに居場所を持つかという問い”は、“一体自分は何者なのかという問い”に結びつく<sup>44</sup>。言い換えるならば、自分が属する場所つまり、居場所を獲得すること<sup>45</sup>は、「これが、わたし」と言えるアイデンティティの獲得へと導くのである。

しかし一方で、「これが、わたし」と言える「同一性」に対し、「一体わたしは何者であるのか」(西平, 1993, p.204)と自分自身に疑いをかけること、それをエリクソンは、「アイデンティティの危機<sup>46</sup>」(エリクソン, 1982, p.3)と呼ぶ。では、アイデンティティの危機つまり、アイデンティティに対して「違和感」(小沢, 2004, p.81)

---

<sup>44</sup> 西平は「(中略)『自分はどこに属する者か』という帰属感の問いが、(中略)『一体自分は何者なのか』という問い」(西平, 1993, p.211)に結びついていると論じている。

<sup>45</sup> 『青年心理学事典』福村出版、2000年によると、居場所とは、「生き生きと生きるために必要なものであり、かつ私が私であることを確認し実感するためのものでもあるといえる」(p.285)としている。

<sup>46</sup> アイデンティティとは、「(中略)私が(この人間として生きている)私であること(私=私)を示している」。(『青年心理学辞典』, 2000, p.155)しかし、その感覚が揺らいだとき、「私が私という人間として生きていることについての実感や確信(中略)を失ってしまいそうになる危機」(『青年心理学辞典』, 2000, p.155)を生む。そのことをエリクソンは、「アイデンティティの危機」と呼んだ。

を持つときとはどのような場面なのだろうか。アイデンティティに対して「違和感」を持つ場面とは、「(中略) 他者から承認してもらえない (後略)」(西平, 1993, p.204) とき<sup>47</sup>なのである。

そこでアンへと視点を戻す時、アンは他者から承認してもらうことは出来たのだろうか。まず、アンがマリラに出会った当初の頃を振り返ろう。アンは、アンの名前「Anne」を呼ぶとき、「Ann」ではなく「e」の付いたアン（「Anne」）で呼んでほしいとお願いする。

「(中略) アンという名を呼ぶんでしたら、e のついたつづりのアンで呼んでください」(モンゴメリ, 2008, p.48)

“(中略) But if you call me Anne please call me Anne spelled with an e.”  
(Montgomery, 2007, p.27)

その理由について、アンは次のように話す。「(中略) Ann はひどく感じがわるいけれど、Anne のほうはずっと上品に見えるわ。(後略)」アンは、最も正しい発音で自分の名前が呼ばれることを重要視する。アンは、他者から正しい発音で名前を呼ばれることが、つまり他者に認められるということに繋がっていたのである。

アンが徐々に自分のコンプレックスを克服し始めた頃、アンは、マリラに次のように話す。

「(中略) あたしほんとうに、よい人になりたいのよ、マリラ。(中略) そして大きくなったら、マリラのじまんのたねになりたいの」(モンゴメリ, 2008, p.378)

---

<sup>47</sup> エリクソンは、アイデンティティを持っているという意識的な感覚は、「一方は、自分自身の斉一性と時間の流れの中での連続性を直接的に知覚すること。他方は、それと同時に、自分の斉一性と連続性を他者が認めてくれるという事実を知覚すること」と述べている。(エリク・H・エリクソン『アイデンティティとライフサイクル』西平直・中島由恵訳、誠信書房、2011年、p.7) つまり、他者からの承認がない場合、アイデンティティの危機が生じるのである。

『最新 心理学事典』平凡社、2013年によると、アイデンティティの「違和感」といったアイデンティティの感覚について「わたしがわたしであるという自信、すなわちアイデンティティの感覚は他者の存在によって支えられているものであることが強調されている」。(p.2)

アンはマリラに認められることを目指したのである。すると、マリラはアンがクイーン学院に合格しクイーン学院の寮に入るため、アンとお別れをした後これまでに味わったことのない寂しさに襲われる。マリラは、「(中略) もう元気な娘の姿はないのだと思うと、たまらなくみじめな気持ちになり、枕に顔をうずめてはげしく泣き出した」。(モンゴメリ, 2008, p.474) それぐらいマリラは、アンを自分の娘だと認め、かけがえのない存在としていた。

ここで、アンが感じた自身への変化について見ていこう。人間は、発達する段階で「大人と子どもの境界線を引き、大人として自分への成長を強く欲するからこそ、アイデンティティ、自分が自分であることを強く納得して受け入れたいという思いが生じる(後略)」。(小沢, 2003, p.73) そこで、アンが、「(中略) 大人として自分への成長を強く欲する(後略)」(小沢, 2003, p.73) 場面がある。アンが、数日後にクイーン学院を受験するという時の場面である。アンは、マリラに次のように語る。

「(中略) 大人になりだすと、たくさん考えたり、きめたりしなければならぬことができるものね。(中略) 大人になるってたいへんなことね<sup>48</sup>、マリラ。あたしみたいにマリラや、マッシュウ小父さんや、ミセス・アランやステイシー先生のようないいお友達をもっている者は、りっぱな大人にならなくてはならないわね。(後略)」(モンゴメリ, 2008, p.433)

アンは、周囲の尊敬する大人のように、「立派な大人」になりたいと強く思うようになる。そして、アンは大人へと変化していく自分を受け入れていく。

### 第3節 否定的アイデンティティから肯定的アイデンティティへの転換

アンは、居場所を獲得すること、周囲の人間から承認されていくこと、自分を受

---

<sup>48</sup> 同箇所(大人になるってたいへんなことね)は、山本史郎訳によると「マリラ、成長するってほんとうに重要なことよね」(モンゴメリ, 1999, p.364)と訳されている。また、松本侑子訳によると「大人になるって真剣にとりくむべきことなのね、マリラ」(モンゴメリ, 2012, p.364)と訳されている。同箇所から、大人になることを真剣に受け止めるアン姿を読み取る事が出来る。

け入れていく<sup>49</sup>ことによって「これが、わたし」と言える「納得感」(小沢, 2004, p.81)のあるアイデンティティを獲得していく。それと同時に、アンは次第にギルバートに対し次のように感じ始めるのである。

ギルバートは賢く、ものごとにたいして自分の意見をもち、人生の最良のものをとり、また自分の最良のものを与える意志を持っていた。(モンゴメリ, 2008, p.483)

一方でこれまでと同様に、アンは「ギルバートにたいする競争意識はアヴォンリーのとくと変わらず激しかった(後略)」。(モンゴメリ, 2008, p.485)しかし、アンが最も変化したことがある。それは、アンがギルバートを認め始めたことである。それは、アンの次の言葉に象徴されている。

(中略) いまではアンはギルバートをうち負かそうとねがってはおらず、ただ好敵手として堂々とした勝利を勝ちえたいだけだった。いまでは、もう、この競争がなければ生きがいがないなどとは思わなかった。(モンゴメリ, 2008, p.485)

アンは、ギルバートとの競争を生きがいとは思わなくなるのである。これまでアンは、ギルバートよりも上位の成績を取ることに、ギルバートを長らく許さず憎み続けることで得られる優越性によって、自身のアイデンティティを保持してきたと言える。だが、やがて、アンにとってギルバートはアイデンティティを保持するための他者ではなく、共に切磋琢磨出来る他者へと変化したのである。

ここで、「アンのアイデンティティは、どのように変化していくのだろうか」という当初の本章の問いに、より近づけてみよう。そこで、アンが初めて下した決断を思い出してみよう。アンは、マシュウの死をきっかけとして、アンが既に掴み取っ

---

<sup>49</sup> アンの自分への肯定における最たるものは、コンプレックスの克服である。クイーン学院を卒業した頃のアンは「髪の毛のことがあんなに気になったなんて、今思いだすと時々おかしくなるのよ。(中略) そばかすはいつのまにかすっかり消えてしまったし(後略)」(モンゴメリ, 2008, pp.507-508)と語り、長きに渡り克服できなかったコンプレックスは、この頃には既に気にならないと述べている。

ていたレドモンド大学への進学を諦めた決断である。その理由は、残されたマリラと共にグリーン・ゲイブルスを守っていくことだった。

西平はアイデンティティの問いとは、「1つの立場の＜選択＞」(西平, 1993, p.249)を含むとする。自らが、自らの手で自らのために生き方を選択すること、つまり「多くの可能性のなかから1つを選びとること、逆に言い換えれば(中略)立場を1つに＜限定する＞(後略)」(西平, 1993, p.249) ことを含むのである。

アンは、一生懸命に勉強した末に獲得したエイヴリー奨学金と、そしてクイーン学院に入学後ずっと願っていたレドモンド大学への入学を自らの手で手放した。つまり、アンは自己犠牲をし、家族を守る選択をしたのである。また、目が不自由になっていくマリラは、たった一人でグリーン・ゲイブルスを守ることは出来ないとグリーン・ゲイブルスを売ることを決める<sup>50</sup>。つまり、アンが家族を守る選択は、同時にグリーン・ゲイブルスを守る選択<sup>51</sup>でもあったのである。

アンは、アン自身の「夢のあり方」(“the object of my ambitions”<sup>52</sup>) (モンゴメリ, 2008, p.516) (Montgomery, 2007, p.240) つまり、アンの目標が変わったことをマリラに告げる<sup>53</sup>。これまでアンの目標は、ギルバートよりも上位の成績を収めること、そして大学に行くことだった。しかし、その目標は、地元の学校で教師をすること、マリラを守ることそしてグリーン・ゲイブルスを守ることに書き換えられたのである。このようにアンの目標が書き換えられたことは、同時にアイデンティティの転換を遂げたことを意味する。

アンが、このようにアイデンティティの転換を遂げたとき、アンは納得感のあるアイデンティティを獲得したと言える。当初アンのアイデンティティは、ギルバートに対し、優越性で保持されてきた。しかし、そのアンの否定的なアイデンティティは、居場所を獲得すること、他者からの承認、自らが自らを認めることを通して、アイデンティティの転換を遂げ肯定的なアイデンティティを獲得つまり、アイデン

---

<sup>50</sup> モンゴメリ, 前掲書, 2008, pp.513-514 での場面。

<sup>51</sup> アンはマリラに「とにかくこの大事なグリーン・ゲイブルスを何としても守っていきましょうよ」(モンゴメリ, 2008, p.516) と告げる。

<sup>52</sup> 同箇所は、山本史郎訳によると「野心の目標」(モンゴメリ, 1999, p.437) と訳され、松本侑子訳によると、「将来の目標」(モンゴメリ, 2012, p.441) と訳されている。“ambition”は、大望、野心という意味(『ジーニアス英和辞典<改訂版>』)であるが、本論では「目標」として使用する。

<sup>53</sup> モンゴメリ, 前掲書, 2008, p.516 での場面。

ティティの達成を遂げたのである。

フェミニズムの視点から考察する小倉千加子<sup>54</sup>は、マッシュウの死は、「アンを結婚という「終着点」に辿り着かせるためにのみ存在する」（小倉, 2004, p.125）と指摘する。さらに、長谷川は、マッシュウの死によって「大学進学をあきらめ地元の学校で教師をすることを決心」（長谷川, 2001, p.76）をしたときのアンが流した涙について、「自分とマリラの役割交替が起こったことを悲しむものだったのかもしれない」（長谷川, 2001, pp.76-77）と指摘する。また、横川は、アンについて「自分をさらけ出すことなく、自分の深部をのぞき込むことなく、選ばれた道を行く少女である」（横川, 1989, p.139）と述べ、だからこそ『赤毛のアン』の世界には葛藤がない<sup>55</sup>」（横川, 1989, p.139）と主張する。

だが、アンは、結婚へ導かれたのでも、マリラとの役割交替で悲しんだのでも、選ばれた道を行く少女でもない。アンは、マッシュウの死によって、目標を書き換え、家族を守る自分というアイデンティティへの転換がなされた。そして、それは、誰かに選ばれた道ではなく、アン自らの決断によってなされたものである。

アンは、目標を変更すると決断したとき、「アンの涙と重苦しい心」(her tears and her heaviness of heart) (モンゴメリ, 2008, p.512) (Montgomery, 2007, p.239) が、「しかしベッドにはいるころには唇には微笑がうかび、心は平和になっていた」。(but before she went to bed there was a smile on her lips and peace in her heart.) (モンゴメリ, 2008, p.512) (Montgomery, 2007, p.239) アンは、自らで新しい目標を決断したとき、それまでの辛い気持ちが少しずつ消えていくのを感じていたのである。そして、アンは「自分のすべきことを見てとった」。(モンゴメリ, 2008, p.512)

そして、アンがグリーン・ゲイブルスに残ると聞いたマリラは、アンに向かって、「(中略) そんなことはできないよ。わたしのためにあんたを犠牲にするなんて」(モンゴメリ, 2008, p.515) と告げた。しかし、アンは「犠牲ではない」と断言する。アンは、納得して自らの進む道を決断したのである。

---

<sup>54</sup> 『「赤毛のアン」の秘密』岩波書店、2004年の著者。

<sup>55</sup> 横川寿美子「アンとエミリー—モンゴメリ作品に見る家族とエロス—(後篇)」『児童文学評論 NO.25』大阪新児童文学会、1989年のなかで、横川は、アン自身に葛藤があるとすれば「ギルバートへの複雑な感情だけだが、アンの知らない彼の気持ちをあらかじめ知らされている読者にとって、それは何らの緊張感をももたらすのではない」(p.139)と述べている。

アンは、マリラに「マリラとあたしほど、ここを愛している人はいないわーだから大切に守っていきましょう」(Nobody could love it as you and I do—so we must keep it.) (モンゴメリ, 2008, p.517) (Montgomery, 2007, p.241) と伝え、マッシュウが亡くなった今、これまでと同様にグリーン・ゲイブルスを共に守っていこうと誓うのである。

アンのアイデンティティの転換と共に、その時マリラのパースペクティヴも転換を遂げる。パースペクティヴ(perspective)とは「空間上の一つの視点(a stand point of view)に目を限定したものの見方」(西平, 1993, p.248)を指す。言い換えるならば、パースペクティヴとは、「常に<いくつかのなかの一つ(one of them)>という仕方では存在しない相対性＝関係性」(西平, 1993, p.251)のなかでこそ成り立つ。

マリラは、これまでアンが大学に行くことは、マリラの誇りだったと言える。さらに、マリラは、アンが大学に行くことはアンの夢を叶え、それがアンにとって最善の選択だと考えていた。しかし、マリラのパースペクティヴは、「(中略)視覚対象の背後にあるもの全てをわれわれの視野から隠し(後略)」(エリクソン, 2000, p.144)一面的なものでしかなかった。そして、アンが「(中略)より広範なより包括的な(後略)」(エリクソン, 2000, p.192)アイデンティティへの転換を果たすことで、マリラにも相対化されたパースペクティヴへの転換が起こったのである。

しかし、アイデンティティとパースペクティヴは、暫定的なものであり、常に生まれ変わる必要がある。それは、固定化されることなく、常に組み替えられていく作業が必要ということである。そのことを西平は、「再構造化<sup>56</sup>」(西平, 1993, p.253)と呼ぶ。さらに、西平は「再構造化」について次のように言い表す。

(中略) アイデンティティを持つと同時に壊すことを、壊すと同時に作り直すことを、つまりは、絶えず乗り越えてゆくという自己超越運動(西平, 1993, p.253)

---

<sup>56</sup> 西平は「再構造化」について、「アイデンティティの「構造」という言い方をしてみるならば、その構造を崩し、脱構造化することによって、より広い、より包括的な構造へと組み替えてゆく」(西平, 1993, pp.252-253) ことである、と論じている。



アイデンティティやパースペクティヴは、一つのそれに依存し固定化されると、「＜排他＞となり＜偏見＞となり」（西平, 1993, p.253）うる。その為、西平の述べた「再構造化」されていくこと、つまり常に変化を恐れることなく、繰り返し壊し作り直すことは「より包括的であろうとすること、その方向に自分を超越してゆくこと」（西平, 1993, p.252）へと繋がるのである。

それは、一面的ではなく、相対的に他者との交流を通じて創り上げられて初めて納得感のある肯定的なアイデンティティを構築するのである。さらに、アンは自分と他者という二つの視点から認められることによって、アンを肯定的なアイデンティティの獲得へと導いた。

アンは、自分自身の自己理解が小さな一つの視点つまり、一面的な見方でしかなかった。しかし、アンの発達第4章までで論じた世代継承、歴史、自己超越と共に達成されるとき、小さな視点から相対的なより広い視野へと変化する。

西平は、エリクソンのアイデンティティ思想の真髄について、次のように述べる。「（中略）＜人は一人で立てるが故に、共に立たねばならない<sup>57</sup>>（後略）。（西平, 1993, p.221）そして、さらに「主観的であると同時に客観的、個人的であると同時に社会的」（西平, 1993, p.206）であり、自分と他者とのその両者は「相乗関係（a mutual relation）」（西平, 2008, p.206）にあると主張する。

アンが達成されかけた目標を自らの手で断ち切った事実の裏で、アンは、マリラ、マッシュウ、ダイアナ、地域の人々、学校のクラスメイトそしてギルバートの存在すべてとの相乗関係によって、否定的アイデンティティから納得感のある肯定的なアイデンティティへと転換した。しかし、そのアイデンティティは、固定化されることなく相対的な視野を持ち、壊されまた新たに書き換えられていく必要がある。そのことを西平が「自己超越運動」と呼ぶように、まさにアンはアイデンティティを固定化することなく書き換えていくことによって、今ある自分から、より発達していくのである。

---

<sup>57</sup> 西平は、アイデンティティ思想の真髄について「（中略）＜一人で立つためにこそ共に立つ＞、もしくは＜共に立つのでなければ一人で立ち得ない＞（略）」（西平, 1993, p.224）と述べ、「共に立つ」ことが先行すると主張する。

## 終章

本論は、ここまで『赤毛のアン』の主人公アンの発達のダイナミズムを考察してきた。まず、第1章では、『赤毛のアン』のアンの発達を考察するために、包括的な人間形成論を通して見ることの出来る、西平直が定義した人間形成論の概要について論じた。西平の人間形成論は、エリクソンの研究に新たな視点が加わり、人間の発達を「世代継承」「歴史」「自己超越」と共に検討している。このような西平の人間形成論は、アンの発達のダイナミズムを論じるために用いた。

第2章では、発達と世代継承との関係性を、アンの育ての親であるマリラとマッシュウがアンに施した儀式化の教育に着目し考察を行なった。さらに、世代継承は、相互補完性であることに触れ、アンを育てるマリラとマッシュウはアンに母性や父性を発揮したことについて考察をした。一方で、マリラとマッシュウは、アンとの心の触れ合いを通じて感情を表現すること、人を愛することを学んだ。このような相互性のなかで、マリラとマッシュウはアンを育てた。そのことは、同様に次の世代を育てることを意味すると論じた。

第3章では、発達と歴史の関係性を、人間が生きることは、それと同時に新しい歴史を創り出すことを意味するものとして解釈した。アンは、歴史の生成を担う意味を持つ学校の先生から、学校の先生になることを勧められる。アンが、学校の先生を目標とする理由を提示し、アンが新しい歴史を創り上げようとしたことについて論じた。

第4章では、発達と自己超越の関係性を、アンの想像力に着目し考察をした。アンが度々想像力を使用し、現実世界と子どもの訓練場ともなり得る仮構世界を往来し、そこで得た経験が現実へと活かされることについて論じた。

第5章では、アンのアイデンティティについて考察し、否定的アイデンティティから肯定的アイデンティティへと転換したことを論じた。また、それと同時にマリラのパースペクティヴも書き換えられ、常にそれらは再構造化されていくことを論じた。

本論文の目的は、第1に、文学作品『赤毛のアン』の主人公アンや、周囲の人間は、どのような発達を遂げたのかを明らかにすること、第2に、本論文を読む者と研究する者、そして『赤毛のアン』のなかで生きる登場人物達の3つの視点を交差させること、そして、第3の最終目的は、人間が生き生きとした生き方をするのは

どのような環境に置かれた時なのかということの3点であった。

第1の目的は、本章全体で達成出来たであろう。また、第3の目的については、アンの環境を見ることで達成出来たであろう。しかし、第2の目的については、まだ説明が不十分である。そこで、西平の次の言葉に着目しよう。

アイデンティティの問いは、状況から切り離れた客観的な概念装置の  
解説によってではなく、状況に組み込まれた意味の解説という仕方  
によって、はじめて成り立つことなのである。(西平, 1993, p.190)

人間の発達が生代継承、歴史、自己超越と密接に関係し、それらがアイデンティティの形成へと繋がることは前述した。そのアイデンティティが、概念だけで解説されることは困難であり、実際に状況に組み込んで解説する必要があることを西平は主張する。

本論文で、『赤毛のアン』に人間形成論を組み込み、より具体的な理解をしてきた点は達成出来た。『赤毛のアン』の読者は、アンの生き様を追うことで自己を見つめる。1908年に出版されて以降、『赤毛のアン』が100年以上も読者に愛されるのは、読者に自己を見つめる機会を与えているからである。

さらに、ここでは『赤毛のアン』を読み終えた読者が、アンの最後の決断に悲壮感を感じることなく、どこか光を与えられるその理由に着目したい。『赤毛のアン』の後半の大きなストーリーの本筋は、レドモンド大学に行くために一番の成績を収め、エイヴリーの奨学金を獲得したことで、アンが自慢の娘と評価されることにある。しかし、『赤毛のアン』のストーリーが、クライマックスに向かう中で、アンは達成されかけた目的をマシュウの死によってあっさりと断ち切ることは前述した。

島に残ってマリラと共に暮らし、そしてグリーン・ゲイブルスを守っていくというアンの選択が、アンの当初の本望ではなかったとしても、読者に悲壮感やアンの敗北感を感じさせないのは、アンが自分の選択を通し、その選択の意味を理解し納得したうえで決断を下したからである。

西平は、『青年心理学事典』のなかで、アイデンティティについて次のように語る。

アイデンティティという言葉、エリクソンにとって、生涯を通して人

生と折り合いをつけつづけていく人間理解のための「しかけ」なのである。(西平, 2000, p.15)

アンは、人生のなかで「曲り角」(モンゴメリ, 2008, p.516) に直面したとき、新しいアイデンティティへと転換を遂げた。それは、アンが、置かれた環境のなかで最善の選択であると納得して決断を下した。しかし、それは西平の言葉を使うならば、その時の環境に応じて「折り合いをつけた」ことでもあったのかもしれない。しかし、その選択を受け入れることが出来たアンだからこそ、読者は自己を重ね合わせ、アンの生き方に希望を見出すのかもしれない。

さらに、西平は、発達について次のように述べる。

(中略) 発達とは、直線的な拡大や増加などとはまるで違って、今ある自分を超えてゆきながら、より新しい自分に出会ってゆくという、否定の契機を内に含んだダイナミズムであるだろう。(西平, 1993, p.152)

更に、発達は「自分に死ぬという体験をしながら、しかし今一度、新しい自分を生きようとする死と再生のダイナミズム」(西平, 1993, p.152) と西平が指摘するように、まさに『赤毛のアン』は、アンが今ある自分を超えてゆくために、自分に死ぬという経験をしながら、新しい自分へと出会った発達のダイナミズムの象徴の文学作品なのである。

※本稿は、2014 年度提出 文学研究科 比較文化学専攻 修士論文『『赤毛のアン』における発達のダイナミズム—複合的な人間形成論からの考察—』を要約したものである。

## 【引用・参考文献一覧】

### <引用文献>

#### ■基本テキスト

ルーシー・モード・モンゴメリ『赤毛のアン』村岡花子訳、新潮社、2008年。

ルーシー・モード・モンゴメリ『完全版 赤毛のアン』山本史郎訳、原書房、1999年。

ルーシー・モード・モンゴメリ『赤毛のアン』松本侑子訳、集英社、2012年。

西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会、1993年。

L. M. Montgomery『Anne of Green gables』Edited By Mary Henley Rubio  
University Of Guelph And Elizabeth Waterston University Of Guelph, A  
Norton Critical Edition, 2007.

#### ■辞典・事典

『最新 心理学事典』藤永保監修、平凡社、2013年。

『ジーニアス英和辞典<改訂版>』小西友七編集主幹、大修館、1998年。

『心理学事典』平凡社、1981年。

『青年心理学事典』久世敏雄・齋藤耕二監修、福村出版、2000年。

以下、引用順

#### ■序章

エリク・H・エリクソン『「洞察と責任」－精神分析の臨床と倫理』鎌幹八郎訳、誠信書房、1971年。

松本侑子『赤毛のアンへの旅 秘められた愛と謎』日本放送出版協会、2008年。

長谷川晶子「『赤毛のアン』に学ぶ教育の在り方の研究」『常葉学園大学研究紀要』  
常葉学園大学、第18号、2001年、pp.69-87。

池田幸代「『赤毛のアン』にみる、家族の育児機能と成長に関する一考察」『上智社会福祉専門学校紀要 第3号』上智社会福祉専門学校、2008年、pp.53-61。

赤松佳子「少女小説・青春小説としての『赤毛のアン』」桂宥子・白井澄子編『シリーズ もっと知りたい名作の世界⑩ 赤毛のアン』ミネルヴァ書房、2008年、pp.41-50。

キャサリン・ダルシマー『思春期の少女たち 文学にみる成熟過程』富山太佳夫・

三好みゆき訳、1989年。

赤松佳子『『赤毛のアン』の＜翻訳＞が意味するもの』『カナダ文学研究 第10号』  
『カナダ文学研究』編集委員会、京都産業大学外国語学部英米語学科「多湖研究室」、2002年、pp.77-92。

小沢一仁「居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと」『東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編 26(2)』東京工芸大学工学部、2003年、pp.64-75。

## ■第1章 『赤毛のアン』を読み解く「人間形成論」の概要

鬢櫛久美子「書評 西平直著『エリクソンの人間学』」『教育哲学研究 第69号』教育哲学会、1994年、pp.116-121。

小沢一仁「居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと」『東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編 26(2)』東京工芸大学工学部、2003年、pp.64-75。  
(序章の前掲書と同様)

エリク・H・エリクソン／ジョウン・M・エリクソン『ライフサイクル、その完結＜増補版＞』村瀬孝雄・近藤邦夫訳、みすず書房、2001年。

## ■第2章 発達と世代継承の関係

森田英津子『『赤毛のアン』における“Home”探究—“Marilla of Green Gables”—』『子どもの本と家族：白百合女子大学児童文化研究センター児童文学に見る家族の国際比較プロジェクト論文集』白百合女子大学児童文化研究センター、2010年、pp.94-105。

エリク・H・エリクソン／ジョウン・M・エリクソン『ライフサイクル、その完結＜増補版＞』村瀬孝雄・近藤邦夫訳、みすず書房、2001年。(第1章の前掲書と同様)

池田幸代『『赤毛のアン』にみる、家族の育児機能と成長に関する一考察』『上智社会福祉専門学校紀要 第3号』上智社会福祉専門学校、2008年、pp.53-61。(序章の前掲書と同様)

小嶋秀夫「第3章 親となる過程の理解」『助産学講座3 母性の心理・社会学』医学書院、1991年。

武内珠美「Ⅶ 成人初期・中期 親の愛情」無藤隆・岡本祐子・大坪治彦編『よくわかる発達心理学 第2版』ミネルヴァ書房、2009年、pp.130-131。

- エリック・H・エリクソン『玩具と理性』近藤邦夫訳、みすず書房、2000年。
- 首藤敏元「道徳性」『最新 発達心理学事典』藤永保監修、平凡社、2013年、pp.558-559。
- ジャン・ピアジェ『ピアジェ臨床児童心理学 III 児童道徳判断の発達』大伴茂訳、同文書院、1956年。
- 林道義『父性の復権』中央公論社、1996年。
- 長谷川晶子『『赤毛のアン』に学ぶ教育の在り方の研究』『常葉学園大学研究紀要』常葉学園大学、第18号、2001年、pp.69-87。(序章の前掲書と同様)
- 久保ゆかり「自分の気持ちを抑えられる」無藤隆・岡本祐子・大坪治彦編『よくわかる発達心理学 第2版』ミネルヴァ書房、2009年、pp.78-79。
- 池田幸代『『赤毛のアン』にみる、家族の育児機能と成長に関する一考察』『上智社会福祉専門学校紀要 第3号』上智社会福祉専門学校、2008年、pp.53-61。(序章の前掲書と同様)
- 川端有子「マリラ・カスパートの驚き『赤毛のアン』におけるマリラの成長と女同志の絆の構造」桂宥子・白井澄子編『シリーズ もっと知りたい名作の世界⑩ 赤毛のアン』ミネルヴァ書房、2008年、pp.109-119。
- 髙橋久美子「書評 西平直著『エリクソンの人間学』」『教育哲学研究 第69号』教育哲学会、1994年、pp.116-121。(第1章の前掲書と同様)

### ■第3章 発達と歴史の関係

- 白井澄子「カナダおよびプリンス・エドワード島の歴史と文化」桂宥子・白井澄子編『シリーズ もっと知りたい名作の世界⑩ 赤毛のアン』ミネルヴァ書房、2008年、pp.25-35。
- 木村涼子『学校文化とジェンダー』勁草書房、1999年。
- 小倉千加子「戦後日本と『赤毛のアン』」『男女という制度』斎藤美奈子編、岩波書店、2001年。
- 堀尾輝久『人間形成と教育—発達教育学への道—』岩波書店、1991年。
- 本田和子『異文化としての子ども』紀伊國屋書店、1982年。
- 赤松圭子「9. 少女の想像力、観察力、表現力—『赤毛のアン』」日本イギリス児童文学会(吉田新一・原昌・三宅興子・谷本誠剛)、『英米児童文学ガイド—作品と理論—』研究社出版、2001年、pp.84-92。

#### ■第4章 発達と自己超越の関係

桂宥子「書評から見た『赤毛のアン』出版時の反響」『広島文教女子大学紀要 第26巻 人文・社会科学編』広島文教女子大学・短期大学部、1991年、pp.79-90。

エリク・H・エリクソン『幼児期と社会 1』仁科弥生訳、みすず書房、1977年。

エリク・H・エリクソン『玩具と理性』近藤邦夫訳、みすず書房、2000年。(第2章の前掲書と同様)

エリ・エス・ヴィゴツキー『新訳版 子どもの想像力と創造』広瀬信雄訳、新読書社、2002年。

鈴木忠「遊び（ファンタジー）と幼児の発達：E.H.エリクソンの発達論とV.G.ペリーの教育実践から」『生涯発達心理学研究 2011 生涯発達研究教育センター紀要 第3号』白百合女子大学、2011年、pp.1-15。

鶴見俊輔・高橋幸子編著『教育で想像力を殺すな』明治図書出版、1991年。

高田賢一「自然へのまなざし アン・の想像力の特質」桂宥子・白井澄子編『シリーズ もっと知りたい名作の世界⑩ 赤毛のアン』ミネルヴァ書房、2008年、pp.98-108。

赤松佳子「アン・シャーリーの命名術—『赤毛のアン』の誌的な世界—」『ノートルダム清心女子大学紀要 外国語・外国文学編 第20巻第1号（通巻31号）』ノートルダム清心女子大学、1996年、pp.1-10。

池田幸代「『赤毛のアン』にみる、家族の育児機能と成長に関する一考察」『上智社会福祉専門学校紀要 第3号』上智社会福祉専門学校、2008年、pp.53-61。(序章の前掲書と同様)

エリク・H・エリクソン『玩具と理性』近藤邦夫訳、みすず書房、2000年。(第2章の前掲書と同様)

ドロシー・G.シンガー・ジェローム・L.シンガー『遊びがひらく想像力—創造的人間への道筋』高橋たまき・無藤隆・戸田須恵子・新谷和代訳、新曜社、1997年。

横川寿美子「アンとエミリー—モンゴメリ作品に見る家族とエロス—（後篇）」『児童文学評論 NO.25』大阪新児童文学会、1989年、pp.99-142。

#### ■第5章 アイデンティティ

エリク・H・エリクソン／ジョン・M・エリクソン『ライフサイクル、その完結＜増補版＞』村瀬孝雄・近藤邦夫訳、みすず書房、2001年。(第1章の前掲書



と同様)

エリク・H・エリクソン『アイデンティティ—青年と危機—』岩瀬庸理訳、金沢文庫、1982年。

小沢一仁「アイデンティティ危機における自分自身への違和感から、アイデンティティを再考する」『東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編 27 (2)』東京工芸大学工学部、2004年、pp.79-89。

小澤一仁「居場所」『青年心理学事典』久世敏雄・齋藤耕二監修、福村出版、2000年、p.285。

小澤一仁「アイデンティティ危機」『青年心理学事典』久世敏雄・齋藤耕二監修、福村出版、2000年、p.155。

エリク・H・エリクソン『アイデンティティとライフサイクル』西平直・中島由恵訳、誠信書房、2011年。

平石賢二「アイデンティティ理論—アイデンティティの感覚—」藤永保監修『最新心理学事典』平凡社、2013年、p.2。

小沢一仁「居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと」『東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編 26(2)』東京工芸大学工学部、2003年、pp.64-75。  
(序章、第1章の前掲書と同様)

小倉千加子『「赤毛のアン」の秘密』岩波書店、2004年。

長谷川晶子『「赤毛のアン」に学ぶ教育の在り方の研究』『常葉学園大学研究紀要』第18号、2001年、pp.69-87。(序章の前掲書と同様)

横川寿美子「アンとエミリー—モンゴメリ作品に見る家族とエロス— (後篇)」『児童文学評論 NO.25』大阪新児童文学会、1989年、pp.99-142。(第4章の前掲書と同様)

エリク・H・エリクソン『玩具と理性』近藤邦夫訳、みすず書房、2000年。(第2章、4章の前掲書と同様)

## ■終章

西平直「エリクソン」『青年心理学事典』福村出版、2000年。

<参考文献>以下、50音順

アンソニー・ギデンズ『近代とはいかなる時代か？ーモダニティの帰結ー』松尾精文・小幡正敏訳、而立書房、1993年。

伊澤祐子、藤掛由美子、武内素子「『緑の切妻のアン』のモデルを考える」『宮城学院女子大学 研究論文集 89号』宮城学院女子大学文化学会、1999年、pp.67-102。

内田伸子『想像力の発達ー創造的想像のメカニズムー』サイエンス社、1990年。

エリク・H・エリクソン『幼児期と社会 1』仁科弥生訳、みすず書房、1977年。

エリク・H・エリクソン『幼児期と社会 2』仁科弥生訳、みすず書房、1980年。

エリク・H・エリクソン『歴史のなかのアイデンティティ』五十嵐武士訳、みすず書房、1979年。

エリク・H・エリクソン『アイデンティティ』岩瀬庸理訳、金沢文庫、1982年。

太田堯『教育とは何か』岩波書店、1990年。

柏木恵子『子どもが育つ条件ー家族心理学から考える』岩波新書、2008年。

桂宥子『現代英米児童文学評伝叢書 2 L.M.モンゴメリ』KTC 中央出版、2003年。

桂宥子『シリーズ・はじめて学ぶ文学史⑥ はじめて学ぶ英米児童文学史』ミネルヴァ書房、2004年。

キャロル・ギリガン『もうひとつの声』岩男寿美子・生田久美子・並木美智子、川島書店、1986年。

清水弘司『なにが子どもの転機になるかー自分なりの人生を生きる子どもたち』新曜社、2002年。

白井澄子・笹田裕子編『世界文化シリーズ<別巻>① 英米児童文化 55のキーワード』ミネルヴァ書房、2013年。

シャーリー・フォスター、ジュディ・シモンズ『シリーズ<子どもと本 2>本を読む少女たちージョー、アン、メアリーの世界』川端有子訳、2002年。

ジョン・ロウ・タウンゼンド「新しい衣装をまとった教訓主義」渡辺茂男訳、『オンリー・コネクト I 児童文学評論選』岩波書店、1978年、pp.54-66。

谷本誠剛『児童文学とは何か』中教出版、1990年。

西出知香「『赤毛のアン』における夢達成へのプロセス」『英知大学大学院論叢 第1巻第1号』英知大学大学院人文科学研究科、1999年、pp.137-151。

西村清和『遊びの現象学』勁草書房、1989年。

『日本児童文学 2 特集＝赤毛のアン 古典を考える 7』第 4601 号、日本児童文学者協会、1980 年。

林道義『母性の復権』中央公論社、1999 年。

古庄高「幼児の遊びにおける虚構の世界」『神戸女学院大学論集 27(3)』神戸女学院大学研究所、1981 年、pp.43-63。

古庄高「アドラー心理学による幼児のしつけ」『神戸女学院大学論集 53(2)』神戸女学院大学研究所、2006 年、pp.129-148。

松田高志「人間形成と『模倣』」森田孝他編『人間形成の哲学』1992 年。

松本侑子他『赤毛のアン』の翻訳物語』集英社、1998 年。

矢野智司『自己受容という物語ー生成・贈与・教育』金子書房、2000 年。

山本一雄「『緑の切妻屋根の家のアン』と『赤毛のアン』との間ーアン』の養父母の役割ー」『石川工業高等専門学校紀要 第 23 号』石川工業高等専門学校、1991 年、pp.137-148。

山本史郎『東大の教室で『赤毛のアン』を読む 英文学を遊ぶ 9 章』東京大学出版会、2008 年

横川寿美子『「赤毛のアン」の挑戦』宝島社、1994 年。

ルーシー・モード・モンゴメリ『アン』の愛情』村岡花子訳、新潮社、2008 年。

#### ■辞典・事典

『広辞苑 第 6 版』新村出編、岩波書店、2008 年。

『発達心理学事典』日本発達心理学会編、丸善出版、2014 年。